

二、六週間の暴虐

南京を指す競争

日本の南京攻略の戦略は単純だった。皇軍はこの都市の二方向が河川で封鎖されているという事実を利用した。古代より多数の王朝の都だった南京は揚子江南岸の川が屈曲する地にあり、揚子江は都市の西側を北に流れてから東に向きを変える。南京の東南から半円形の前線を収縮していけば、日本軍は揚子江の自然の障壁を利用して都市を完全に包囲し、退路を断つことができる。

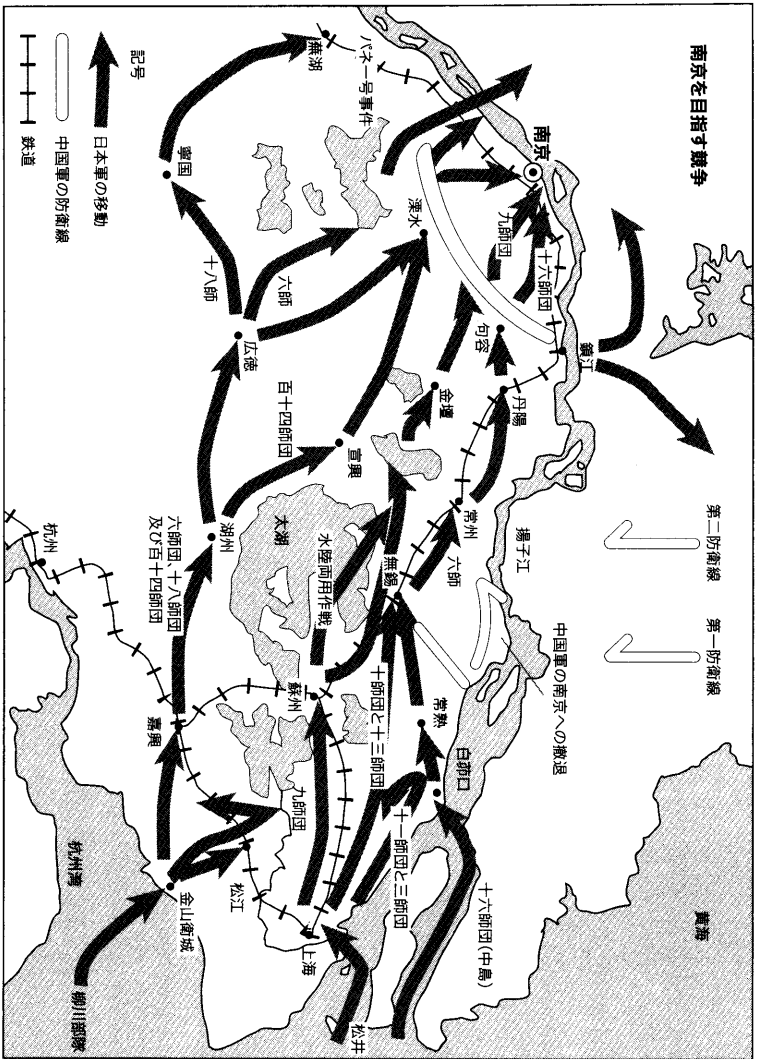
一 一月下旬、日本軍の三つの軍団が並行して南京に向けて進撃していた。ひとつは揚子江南岸を西に向かつて進んでいた。この軍団は揚子江デルタ地域に入り、上海の西北にある白茆江を通り、京滬鉄道（南京・上海鉄道）に沿って進んでいた。日本軍の爆撃により、この地域のほとんどの橋は破壊されていた。軍団を率いていたのは、日本軍の駐仏情報将校を務め、天皇裕仁の秘密警察の長を務めた経歴を持つ中島今朝吾である。中島についての文献は多くないが、残された記録はどれもこれも芳しくないものばかりである。『天皇の陰謀』の著者デイヴィッド・バーガミニは彼を「小さなヒムラーであり、思想取締り、弾圧、拷問の専門家であった」と書き、中島に関する別の文献から、彼が南京に人間を焼く特殊

な油を携えてやってきたサディストだったという記述を引用している。彼の伝記を書いた木村久邇典でさえも、中島が「獸的」で「暴力的な男」だったと描いている。

もうひとつの軍団は、上海と南京の間にある太湖を突っ切り、水路と陸路の両方を進む大胆な攻撃を準備していた。この部隊は上海を起点にして、中島の部隊よりも南の経路を西に向かつて進んでいた。部隊を指揮していたのは松井石根大将で、小さな口髭を蓄え、結核の持病を持つ小柄な弱々しい男だった。中島とは異なり、松井は学者の家系から出た敬虔な仏教徒だった。彼はまた、上海南京区域全体に対する日本軍の司令官でもあった。

松井の部隊のさらに南側を三番目の軍団が移動し、北西に向きを変えて南京を目指していた。この部隊の長は柳川平助中将で、文学に興味を抱く禿頭の小柄な男だった。日本の中国侵略当時の彼の人生は、南京大虐殺に何らかの形でかかわった日本人のうち誰よりも謎に包まれている。彼の伝記を書いた菅原裕によれば、柳川は一九三二年の反乱を中止させようとしたために、日本の陸軍を支配していたファッショ的な派閥に排斥された。左遷され予備役に編入された後、柳川は中国で軍司令官を務め、「敵首都南京を陥れ、曠古の偉勲を立てた」が、軍中央部は彼の姓名や写真を公表することを差し止めた。多くの日本人には、柳川は「覆面將軍」として知られていた。

南京への経路にある地域は、どこも容赦されなかった。日本の古参兵は小さな村落をもれなく襲撃し、人影を目にするや棍棒で殴打し銃剣で刺し殺した。しかし、受難を強いられたのは小さな村落だけではなく、太湖東岸に位置する蘇州市の例を見てみよう。蘇州は中国最古の都市のひとつで、繊細な絹の刺繍、王宮、寺院などで知られていた。運河と古い小橋の風情を見た西洋人は、この街を「東洋のベ



ニス」と呼んだ。一月一九日の朝、激しい雨の中で、中国軍歩哨に見咎められないよう頭巾をかぶつた日本軍前衛部隊が蘇州の城門を通過した。城内に入ると、日本軍は市内で何日にもわたつて殺人、略奪を続け、古跡を焼き払い、何千人もの中国人女性を拉致して性奴隷にした。チャイナ・ウィークリー・レビュー誌 (China Weekly Review) によれば、この侵略行為により、市の人口は三五万人から五百人に激減したという。

あるイギリス人の駐在記者は、日本軍が通過した九週間後の、松江（上海郊外の地区）に何が残されていたかを記録している。「放火破壊されていない建物ほとんど見当たらない」。彼は書いている。「焼け焦げた廃墟と人気がない街路、唯一の生き物である野犬が人間の死体のごちそうで不自然に肥えている光景は異様だ。一〇万人ほどの稠密な人口がいたはずの松江全体で、私が見た中国人は、フランス宣教師の屋敷に悲嘆に暮れて隠れていた五人の老人だけだった」。

朝香宮が指揮権を握る

しかし、最悪の事態が訪れるのはこれからだった。

日本軍が南京に照準を定めた一二月七日、蘇州の野戦司令部にいた松井大将は発熱に襲われた。持病である慢性結核の症状が悪化したのである。病は、権力が松井から皇族の一人へ移行する瞬間を見計らつたように松井を襲った。そのわずか五日前に、天皇裕仁は松井を昇進させて直接の指揮から遠ざけ、彼に代えて天皇の叔父である朝香宮鳩彦王を前線に送った。新体制では、松井は中国中部全域を担当することになり、三〇年の軍隊生活の経験を持つ朝香宮中将が南京包囲軍の新しい司令官に任じられた。皇

族であることにより、朝香宮は南京の前線における他のすべての權威を無効にしてしまふ強權を持つことになった。また、彼は中島中将や柳川中将とともに、情報將校としてパリで三年間暮らした経験があり、そのために松井よりもその両名に親しかった。

この重要な時期に、なぜ天皇裕仁が朝香宮をこの地位につけたのかについては、多くを知ることにはできない。しかしバーガミニは、一九三六年二月に発生した軍事反乱に関する政治問題で天皇の弟である秩父宮に与して裕仁に逆らつた朝香宮が試されたのだと信じている。宮廷内の評価で朝香宮を「宜しくない」態度を持つ皇室の一員として名指しした裕仁は、明らかに叔父を南京の司令官に任命することで、彼自身への償いの機会を与えたのである。

当初、これは些細な配置換えのように見えたが、後に、何十万人の中国人の生命に対して、決定的な変更だつたことが明らかになつていく。

日本軍の内部で実際に何が起つていたかを記述することは非常に難しい。利用できる詳細な情報のはほとんどは、後年の裁判で松井とその同僚が語つたものや信頼性が疑わしい証人が語つたものである。で、その引用には相当の警戒心が必要である。しかし、これらの証言を信じていることができるのであれば、そこに参考にできるものがあるだろう。皇族の新参者が權力を濫用することへの用心から、松井は南京への侵略に関する一連の道德規律を發布した。彼は、配下の軍隊に対して、南京城から数キロメートル離れた地域に再結集させ、市内にはよく訓練された少数の部隊だけが入り、占領を完了するよう命令し、「支那軍民をして皇軍の威風に敬仰帰服せしめ」ようとした。彼はまた、病床に参謀將校たちを招集し

て、次の注意事項を發布した。

皇軍が外国の首都に入城するは有史以来の盛事にして……世界のひとしく注目しある大事件なるに鑑み、正々堂々、将来の模範たるべき心組をもつて各部隊の乱入、友軍の相撃、不法行為など絶対に無からしむを要す。

……あらかじめ注意事項、とくに城内外国権益の位置等を徹底せしめ、絶対に過誤なきを期し、要すれば歩哨を配置す。……略奪行為をなし、また不注意といえども火を失する者は、厳罰に処す。軍隊と同時に多数の憲兵、補助憲兵を入城せしめ、不法行為を摘発せしむ。

しかし、事態は松井の制御の及ばない別の場所で醸成されていた。一二月五日、物語は朝香宮鳩彦王が飛行機で東京を発ち、三日後に前線に到着したときに始まる。南京から南東に一〇マイル(約一六キロメートル)ほど離れた野戦司令部に程近く、放棄されたままになっていた郊外の別荘で、朝香宮は、パリ時代の同僚で、左臀部の負傷から回復していた中島中将に会った。中島は朝香宮に、日本軍は南京付近で三〇万人の中国軍を包囲しているが、予備交渉の結果、彼らが降伏に応じる準備ができていることが明らかにになったと語った。

この報告を聞いた後、朝香宮の司令部から、朝香宮個人の押印がある「秘、読後焼却のこと」と記された一連の命令書が送付された。現在では、その命令書の内容は「捕虜はすべて殺せ」という単純な通告であったことが明らかになっている。不明なのは、この命令書の発行が朝香宮本人によるものだった

かどうかという点である。*

※ 後に、朝香宮の参謀情報将校だった長勇が友人に、彼自身が主導して命令書を偽造したことを告白した。陸軍将校だった田中隆吉は、当時陸軍歩兵第七十四連隊の連隊長だった長勇が一九三八年の四月に彼に興味深い話をしたと語った。その話によれば、長が、杭州湾に上陸し内陸に進軍していたとき、三〇万人の中国軍が退路を断たれ、武器を捨てて日本軍に降伏した。「この多数の捕虜を如何に取り扱うべきやは食糧の關係で、一番重大な問題となった」。長は報告口調で語った。

事態の進展の結果、長は食糧問題を即座に解決する方法を採用した。「直ちに何人にも無断で隷下の各部隊に対し、これらの捕虜をみな殺しにすべしとの命令を發した。自分はこの命令を軍司令官の名を利用して無線電信に依り伝達した。命令の原文は直ちに焼却した」

この話の真偽を確認することは不可能だが、たとえ長が勝手に殺害命令を偽造したとしても、これが朝香宮鳩彦王の虐殺行為に対する責任を免除することにはならない点に注意しなければならない。朝香宮は虐殺が始まった後に、虐殺命令を取り消す命令を出すことができたのだし、彼の情報将校を軍法会議にかけることもできたのである。

41 日本軍が南京に入城したとき、中国人捕虜の殺害命令は書面として作成されただけではなく、下位将校にも通達された。一九三七年二月一三日、日本陸軍歩兵第六十六連隊は次の命令を受け取った。

大隊戦闘詳報、午後二時零分、聯隊長ヨリ左ノ命令ヲ受ク。

左記

イ、旅団命令ニヨリ捕虜ハ全部殺スベシ。

其ノ方法ハ十数名ヲ捕虜シ逐次銃殺シテハ如何。

……

午後三時三十分各中隊長ヲ集メ、捕虜ノ処分ニ付キ意見ノ交換ヲナシタル結果、各中隊（第一、第三、第四中隊）ニ等分ニ分配シ、監禁室ヨリ五十名宛連レ出シ、第一中隊ハ露營地南方谷地、第三中隊ハ露營地西南方凹地、第四中隊ハ露營地東南谷地附近ニ於テ、刺殺セシムルコトトセリ。但シ、監禁室ノ周圍ハ嚴重ニ警戒兵ヲ配置シ連レ出ス際絶対ニ感知サレザル如ク注意ス。

各隊共ニ午後五時準備終リ、刺殺ヲ開始シ、午後七時三十分刺殺ヲ終ヘリ。聯隊ニ報告ス。

命令は冷酷な論理に基づいている。捕虜には食糧を提供できないので、彼らは抹殺されなければならない。彼らを殺害することにより、食糧問題を取り除くことができるだけでなく、報復の可能性を減らすこともできる。そもそも、死んだ敵にはゲリラ部隊を組織することができない。

とはいえ、命令を実施することは別問題である。一月一三日未明に日本軍が城壁を突破して城内に入ったとき、彼らは何倍もの人数を相手にする状態になった。後に、歴史家は五〇万人以上の民間人と九万人以上の軍人が南京に閉じ込められたが、市を攻撃した日本軍兵士は五万人程度だったと推定している。中島中将は、何万もの中国人捕虜を殺すことが大変な作業であることを知っていた。「千、五千、一万ノ群集トナレバ之ガ武装ヲ解除スルコトストラ出来ズ……之ガ一旦搔（騷）擾セバ始末ニ困ル」。

捕虜の殺害

自らの人的資源が限られていたために、日本軍は詐欺的な方法に強く頼った。大虐殺の計略はいくつ

かの段階からなっていた。中国人に向かい、抵抗をやめれば公正な取り扱いを保証すると約束し、彼らをなだめすかして自ら日本の征服者に降伏するようにさせ、捕えた人たちが百人から二百人の集団に分け、南京近郊の別の殺害場所に連れ出す。中島は、これ以上の抵抗が不可能で、ほとんどの捕虜が意気消沈し、日本軍が命じたどのような指示にでも従うような状態を望んでいた。

これらすべてが日本人の予想よりも容易に遂行された。抵抗は散発的にしか発生せず、実質的には存在しないに等しいものだった。日本軍によって封鎖された都市を抜け出そうとして武器を捨てたとき、多数の中国兵は単によい待遇を望むような心境に変わっていた。降伏し、後手に縛られることを受け入れれば、その後は容易なことである。

多分、元日本軍兵士東史郎の日記ほど、当時の中国兵の無抵抗を的確に表現している文献はないだろう。この日記には南京陥落直後の数千人の中国兵の投降のありさまが描かれている。彼の部隊が広場に集合して歩哨配置から宿舍割に時を過ぎていくときに、突然、約二万人の捕虜の收容命令が来た。東は同僚たちとともに「三、四里（十数キロ）」捕虜を搜索して歩いた。夜になっても歩いていたら、日本人たちは蛙のなき声の様な喧騒を聞く。彼らはまた、暗闇の中に無数の煙草の火が点滅するのを見た。「枯枝に結びつけた二本の、夜風にはためく白旗をとり巻いた七千の捕虜は壯観な眺めである」。東は書いている。捕虜たちはみすばらしい人間のよせ集めだった。ある者は綿入れの水色の軍服に綿入れ水色の外套を着、水色の帽子をかぶっていた。ある者は頭から毛布をかぶり、ある者はむしろの袋を持ち、ある者は布団を背負っていた。日本軍は白旗を先頭に四列縦隊に捕虜たちを並べた。この数千人の捕虜の集団は、投降の次の段階として日本軍が彼らに対応し、指示を与えるのを忍耐強く待っていた。

東は、中国人が戦いを厭う姿を見て茫然とした。飛行士は落下傘ではなく刀を与えられ、捕虜になるよりも自殺するほうが限りなく望ましいとされる軍事的な文化から来た男には、中国軍が死を賭して敵と戦おうとしないことが理解できなかった。捕虜の人数が捕えた側の人数よりも多いことを知ったときに、彼の中国人に対する蔑視の感情は深くなった。

「あり合せの白布をあり合せの木枝に結びつけて、降参するため堂々と前進してきたのであろう様さまを想像すると、おかしくもあり哀れでもある」。東は書いた。

よくもまあ、二個聯隊以上もの兵力を有しながら何らの抵抗もなさずに捕虜になったものだとも思い、これだけの兵力には相当な数の将校がいたに違いないが、一名も残らずうまうまと逃げたものだと感心させられる。我々には二個中隊いたが、もし七千の彼らが素手であるとはいえ、決死一番反乱したら二個中隊位の兵力は完全に全滅させられたであろう。

44 東の心は湧き上がるさまざまな感情で一杯になった。中国兵はしきりに渴きを訴え、水を請い、怯えて、殺害されない保証を欲している。東はそんな中国兵が気の毒に感じた。しかし、彼らの臆病さは東をうんざりさせた。彼は、突然、前の戦闘でひそかにはあるが中国兵を恐れていた自分が恥ずかしくなった。そして、無意識的に捕虜たちの人間性を否定し、けだものや昆虫にたとえていた。

……ぞろぞろと蟻のはうように歩き、浮浪者の群のような無知そのものの表情の彼ら。

規律もなく秩序もなく無知な緬羊めんやうのような群は闇から闇へこそとささやきつつ、歩いていく。

この一群の獣が、昨日まで我々に発砲し我々を悩ませていた敵とは思えない。これが敵兵だと信ずることはどうしてもできないようだ。

この無知な奴隷たちを相手に死を期して奮戦したかと思うと全く馬鹿らしくなってくる。しかも彼らの中には十二、三歳の少年さえ交っているではないか。

日本軍は捕虜たちを近くの村に連れて行った。東は、中国人が大きな家屋に入れられるときに、この家の中が「殺りく場」でもあるかのように入るのをためらっていたのを思い出した。しかし、結局はしかたなく門を通つてぞろぞろと入つていった。何人かの中国人が、日本兵が彼らから毛布や布団をむしりとろうとしたときにだけ日本兵と争つた。翌朝、東と彼の同僚は別の地域の巡回を命じられた。彼らが別の地域の巡回についている間に、捕虜たちは各中隊に二、三百人ずつ割り当てられ、殺されたと、東はあとで知らされた。

おそらく、幕府山付近で発生した捕虜の大量処刑は、南京大虐殺で、最も多数の捕虜が一度に殺された事件だろう。この山は南京の北側、市と揚子江南岸の間に横たわっている。ここで、五万七千人の民間人と元兵士が処刑されたと推定される。

虐殺行為は秘密裡に、手順に沿つて進められた。一月一六日、朝日新聞の横田特派員は、烏龍山、幕府山の砲台の近くで一万四、七、七、七人の中国兵が捕虜になり、この捕虜の人数が問題になっていると報

道した。横田は書いている。「何しろ前代未聞の大捕虜軍として捕へた部隊の方が聊か呆れ気味でこちらは比較にならぬ程の少数のため手が廻りきれぬ始末」。

この事件に関する日記やメモを保存していた元日本軍伍長栗原利一によれば、日本軍は何千もの捕虜を武装解除し、着のみ着のままのほかは、毛布以外をすべて没収し、土壁・草屋根の大型バラックのような建物の列に収容した。一二月一七日に日本軍が捕虜の殺害命令を受け取ると、彼らは命令を非常に注意深く実行に移した。その朝、日本人は中国人捕虜を揚子江の中洲の八卦洲に移すと通告した。彼らは捕虜に対し、移動には特別の用心が必要であると説明して、捕虜の腕を後ろ手に縛ったが、この作業を終えるのに午前中いっぱい午後ほとんどが費やされた。

午後四時から六時までの間のいつごろだったろうか、日本人は捕虜たちを四列縦隊に並べて西に向けて行進させ、丘陵を迂回して進んで川岸で停止させた。栗原は書いている。

捕虜の列の先頭が着いてから三時間か四時間たつころ、掃虜たちも矛盾に気付いていた。川中島へこの大群を移送するといつても、それらしい船など見えないし、川岸にそのための準備らしい気配もないまま日が暮れようとしている。それどころか、捕虜が集められた長円形状のかたまりのまわりは、川岸を除いて半円形状に日本軍にかこまれ、たくさんの機関銃も銃口を向けている。

処刑が始まったときは、すでに中国人が逃走するには遅すぎた。「半円形にかこんだ重機関銃・軽機

銃・小銃の列が、川岸の捕虜の大集団に対して一挙に集中銃火をあびせる」。栗原は言う。「一斉射撃の轟音と、集団からわきおこる断末魔の叫びとで、長江の川岸は叫喚地獄・阿鼻地獄であった」。一時間の間、中国人たちは絶望的な抵抗を続け、その後、何の物音も聞こえなくなった。夕方から夜明けまでをかけて、日本人は一人一人の身体を銃剣で突き刺し続けた。

死体の処分は日本人にとって大きな問題となった。幕府山で虐殺された人々は南京市内および南京周辺で死んでいった人々の一部分でしかないのに、そこでの清掃には何日もの日数がかかった。埋葬はひとつの方法だが、中島中将は彼の日記で、「七、八千人」の死体の山を埋めるための十分な壕を見つけるのが難しいとぼやいている。火葬は別の方法だが、しばしば日本軍では作業を適切に遂行するための燃料が不足していた。たとえば、幕府山の虐殺の後に、日本人は大量のドラムカンのガソリンを死体にかけてそれを焼却したが、すべてを灰にする前にドラムカンが尽きてしまった。「焼かれたあとは黒こげの死体の山が残った」。日本軍伍長は書いた。

多くの死体はそのまま揚子江に投げ棄てられた。

民間人の殺害

兵士たちが大量に投降した後、都市の市民たちを護るものは何もなくなった。このことを知っていた日本軍は、一九三七年一月二三日に南京市内に殺到し、政府の庁舎、銀行および倉庫を占拠し、市街にいる市民に向けて手当たり次第に発砲した。市民の多くは逃げようとして背中を撃たれた。機関銃、拳銃あるいは小銃で、日本兵は中山北路、中央路、あるいは付近の細い道に集まっている負傷兵、老婦

人、子どもたちの人ごみに向けて発砲した。彼らは、都市のいたる所で、小さな路地で、大通りで、ぬかるむ防空壕で、政府の庁舎で、市の広場で中国の民間人を殺害した。被害者が地に倒れ、呻き声をあげ、叫び声を上げると、陥落した都市の道路、路地、あるいは排水溝には、逃げる力もなく辛うじて生きていく人々の血が川のように流れた。

日本人は、南京市内の家々の一軒一軒で中国兵を捜索して、市の住民を組織的に殺害した。しかし、彼らはまた南京の郊外や南京周辺の田園部でも虐殺を行った。城壁の外側に、川に沿って（川は文字通り血で赤く染まった）、池に湖に、そして丘陵の上に死体が積み重なった。南京周辺の農村で、日本軍は通りかかった青年は誰でも、元中国兵である疑いがあるということで射殺した。しかし彼らは、老人や女性のような決して中国兵ではありえない人々でも、日本語による命令、たとえばこちらに移動せよというような命令に従うことを躊躇したり、あるいは単に理解できなかったりした場合に、それらの人々を殺害した。

一二月の下旬には、日本軍のオートバイ部隊が南京市内を巡回し、小銃を担いだ日本軍兵士がすべての街路から路地に至る入り口を警備していた。部隊が一軒ごとを訪れ、門を開いて勝利した軍隊を歓迎するよう要求した。商店の店主たちがこれに従ったところ、その瞬間に日本軍は彼らに向けて発砲した。皇軍はこのようにして何千もの人々を殺害し、商店を組織的に略奪し、もはや不要となったときに放火した。

虐殺行為は、南京にいた多数の日本人従軍記者たちに衝撃を与えた。ある毎日新聞の記者は、恐怖の中で、日本人が中国の捕虜を中山門付近の城壁の上に並べて、小銃に固定した銃剣で彼らを突き刺す光景を報告した。「二列にならべられた捕虜が、つきつきに、城外に銃剣で突き落とされている。その多数の日本兵たちは、銃剣をしごき、気合をかけて、城壁の捕虜の胸、腰と突く。血しぶきが宙を飛ぶ。鬼気せまるすさまじい光景である」。記者は書いた。「そこにわたしはまた、わたしを突き殺そうとした兵の、形相とまみえることになり、しばらくその惨劇を見ながら、ぼうぜん立ちすくんでいた……」。

このような反応を示したのは彼一人ではない。年季の入った従軍記者を含む多くの記者たちが暴力の狂操の前にひるみ、彼らの驚愕によって、さまざまな記録が書き残されたのである。日本軍の従軍記者だった今井正剛は書いた。

とみれば、碼頭一面はまつ黒く折り重なった屍體の山だ。その間をうろろうとごめく人影が、五十人、百人ばかり、ずるずるとその屍體をひきずつては河の中へ投げ込んでいる。うめき聲、流れる血、けいれんする手足。しかも、パントマイムのような静寂。

對岸がかすかに見えてきた。月夜の泥濘のように碼頭一面がにぶく光っている。血だ。

やがて、作業をおえた「苦力たち」が河岸へ一列にならばされた。ただだつと機關銃の音、のけぞり、ひつくり返り、踊るようにしてその集團は河の中へ落ちて行つた。

終りだ。

下流寄りにゆらゆらと揺れていたポンポン船の上から、水面めがけて機銃弾が走つた。幾條か

のしぶきの列があがつて、消えた。

「約二萬名ぐらい」

と、ある將校はいった。

日本の従軍記者小俣行男は、下関に連れて行かれて川に沿って並ばされた中国人捕虜について書いて
いる。

日本兵は捕虜を一列にならべて首を切った。最初の列の処刑が終ると、次の列を前進させて、死体を揚子江に投げこませて、それから前と同じように一列にならべて処刑した。こうして朝から晩まで、つぎつぎに首をはねたが、一日に二千人しか斬れなかつたという。

——彼らの話はまだつづく。

二日目には手が疲れてきたので、機関銃をかつぎ出した。二台の重機をすえて十字砲火を浴びせた。河岸に向つて一列に並ばせて、ドドドドッと、重機関銃の引き金を引いた。捕虜たちはいっせいに河に向つて逃げだしたが、岸までたどりついたものは一人もいなかったという。

日本の従軍カメラマン河野公輝は、次のように書いている。

南京には一日おくれて入った。モーゼル銃二丁を持ち、支那服を着ていたから、城内で憲兵に

とめられた。飛行機で先に着いていた新聞記者やら従軍作家などが、身分を証明してくれてやつと通ることができた。

揚子江に五〇から一〇〇人ぐらいつつ死体が固まって漂っていた。南京城外の池が真っ赤な血の海で、きれいだつたな。カラーで撮つたらすごかつたろうよ。死体の山はたくさんみだし、その中にもまだ眼をあけて生きているものがいっぱいいたな。その屍の山を兵隊が銃剣で刺してまわっていた。下関がことにごかつた。一面、血の海だつた。

実際に民衆を虐殺しているのをこの眼でみたことはない。しかし、捕虜を殺している現場はみだし、ライカにも撮つた。あの中には民衆もずいぶんいただろう。

野戦郵便局長佐々木元勝は南京で、「私は関東の大震災の時、本所の緑町河岸でたくさんの人が折重なり死んでいるのを見たが、これにくらべればもの数でもない」と書いた。

南京における強姦

次に日本人が注意を向けたのは女だつた。

「しかし、女が一番の被害者だつたな」。南京で日本陸軍第一一四師団の兵士だつた田所耕造は回想した。「年寄りからなにか、全部やつちまつた。下関から木炭トラックを部落に乗りつけて、女どもを略奪して兵隊たちに分ける。女一人に兵隊一五人から二〇人くらい受け持たせてね」。

生き残った古参兵たちは、公式には軍中央は敵国の女性を強姦することを禁止していたと主張する。しかし、強姦は日本軍の文化や迷信的な習慣に非常に深く入り込んでいて、誰も制御することはできなかった。多くの兵士は、処女を強姦することにより戦闘における強い力を得ることができると信じていた。兵士たちは強姦の被害者の陰毛で作られたお守りには、負傷から身を護る魔術的な力があると信じ、そのようなものを身につけていたという事実もある。

軍に強姦を禁じる方針があったとしても、それは事が終わった後に兵士たちが被害者を殺害することを勇気づける効果しかなかった。ドキュメンタリー映画 *In the Name of the Emperor* (天皇の名において) でのインタビューで、元日本軍兵士東史郎は、南京における強姦と殺害の過程をあつけらかんと語っている。

はじめ、私たちはピーカンカンというような俗語を使用しました。ピーは「尻」の意味で、カンカンは「見る」という意味です。ピーカンカンは、「脚を開いて性器を見せる」という意味です。中国の女性は下半身の下着をつけない。代わりに紐で締めたズボンをはいている。ベルトはありません。私たちが紐を引っ張ると、尻がむき出しになる。「ピーカンカン」する。そして見る。しばらくして、「今日は風呂に入る日なんだ」というようなことを言い、彼女らを強姦し始める。強姦するだけならばよかったです。そんなことをよかったですというべきではないだろうが。しかし、私たちはいつでも、彼女らを刺し殺した。死体は何も話さないからです。

議論している問題についての無神経さという意味では、田所耕造も東と同じである。「強姦をやらない

兵隊なんかいなかった。そして、たいていやつたあとで殺しちまう」。彼は回想する。「パツと放すとターツと駆けていく。そいつを後ろからパーンと撃つ」。生き残った古参兵によれば、ほとんどの兵士はこのことについての罪の意識を感じていなかったという。「多分、強姦しているときには、相手を女と見ていたのでしょう」。東は書いた。「しかし、相手を殺すときには、豚か何かのようなものとしか考えていなかったのです」。

このような習性は、兵士だけに限られていたわけではない。あらゆる階級の士官たちが、その狂宴に耽つていたのである（第六師団の師団長だった谷寿夫中将でさえも、後に南京での二〇人ほどの女性の強姦容疑で有罪になった）。士官の中には、兵士が市内で輪姦することを奨励するだけではなく、事後に証拠を隠滅するために女性を処分するよう兵士たちに指導する者もいた。「金を払うか、そうでなければ終わつた後でどこか分からぬところで始末をつけてしまえ」。ある士官は部下に語つた。

松井石根の到着

殺人と強姦は、一二月一七日の朝に、病み上がりの松井石根が、祝勝行進のために市内に入ったときに下火になった。松井は、結核の発作から回復した後、海軍の汽艇で川を遡上し、自動車に乗って南京の東側にある三重のアーチ型の中山門にまで行つた。彼はそこで栗毛の馬に乗り、方向を東京の皇居に向き変えて、日本の国营放送のラジオ会社のために天皇に対する万歳三唱の音頭をとつた。「大元帥陛下万歳！」。その後、彼は注意深く死体が清掃された街路を馬で進み、喝采する数万もの兵士に護られつ

つ、都市の北部にある首都飯店に着いた。そのホテルでは、当日の晩に松井のための宴会が催された。残されている記録によれば、南京で怖しいほどに好ましからざることが起こったのではないかと松井が疑ったのは、この宴会のときのようなのである。その晩、彼は幕僚の会議を開き、不要な部隊は城外に退去するよう命令した。翌日、西側のニュースメディアは、日本陸軍内で松井が南京虐殺の真実を知るところを妨げようとする大きな陰謀が形成されたことを報じた。

松井が南京市内における強姦、殺人、略奪の全体像を認識し始めたとき、彼は狼狽の極地に陥った。一九三七年一月二十八日、彼は民間人の顧問に言った。「しかるに今自分は、夢にさえ考えなかつたことも悲しむべき結果をもたらした。中国の友人たちはどんな気持ちでこの南京を立ち退いたことかと思えば、感慨無量である。そして日中両国の前途を考えると胸がいつぱいになって、戦勝の喜びに酔う気持ちにはなれない、実に淋しい思いがする」。彼がその朝に新聞社向けに公式に発表した声明にも、落胆の色合いが見える。

「私は個人的にこの悲劇を民衆に対して残念だと思っている。だがしかし軍隊は中国が悔い改めなければ戦い続けなければならない。いまは、冬であるからして、季節が反省の時を与えてくれている。私は心の底から億万のなんの罪もない民衆に対する同情の意を表するものである」

その日、侵略で死亡した日本兵の埋葬式典を司令部が開催したときに、松井は、士官、連隊司令官、そしてこの都市での狂宴に関係したすべての人たち、およそ三百人に対して譴責の言葉を発した。日本の特派員松本は書いた。「日本の高官が自分の幕僚をどのように叱責したことはなかつた。軍は、松井の振る舞いが信じられなかつた。参列していた幕僚の中には皇族にあたる人もいたのである」。

一二月一九日に、松井は城外にある朝香宮の司令部に移動し、翌日、上海に戻る駆逐艦に乗船した。しかし、そこでも、松井はさらに驚くべき動きをした。彼はニューヨーク・タイムズ紙の記者に悩みを打ち明け、アメリカの外国特派員に「現在の日本の軍隊は、おそらく世界でもっとも軍紀の乱れた軍隊だろう」と語った。さらに、その月に朝香宮の参謀長に手厳しいメッセージを送った。「不法な行動が続いているという噂がある。特に朝香宮がわれわれの指揮官であるからには、軍紀と士気より一層厳格に保たれねばならない、不正な行為を働いたものは誰でも嚴重に罰せられなければならない」。

新年を迎えても、松井はまだ南京の日本軍兵士の行動を気に病んでいた。祝賀式典で、彼は日本の外交官に語った。「私の部下たちは大変悪い、きわめて遺憾なことをしでかした」。

しかし、強姦も殺人も続いていた。松井にはそれを止めさせる力がないようだった。後年、松井が語ったことを信じるとすれば、彼の南京の短期訪問も、結局は、松井に同僚の前で涙を流させ、落胆させるだけのものだった。一九四八年、絞首刑を執行される前に、松井は、仏教の老師に告白した。「慰霊祭の直後、私は皆を集めて軍總司令官として泣いて怒った。そのときは朝香宮もおられ、柳川中将も方面軍司令官だったが、折角皇威を輝かしたのに、あの兵の暴行によつて一擧にしてそれを落してしまった」と。ところが、このことのあとで、みなが笑った。

従軍「慰安婦」、南京の遺産

南京で発生したとめどない強姦事件の最も奇怪な結果のひとつは、西欧諸国から殺到する抗議に対して示した日本政府の反応である。無法な行為に責任がある兵士たちを押さえつけもせず、罰すること

もなく、それとは逆に、日本の軍上層部は軍隊用の巨大な地下売春システムの創設を計画した。この組織は、アジア全域にその蜘蛛の巣を張り巡らし、数十万人の女性を犠牲にすることになる。「中支那方面軍は、この前後に慰安施設をつくるように指示しています」。中央大学の著名な歴史学者である吉見義明教授は分析する。「これは、上海戦後から南京戦にかけて、大量の強姦事件が起きたため、中国人や欧米諸国の非難を恐れたからだと推定されます」。

計画は単純明快なものだった。日本軍上層部は、八万人から二〇万人ほどの女性を、騙して、人身売買によって、あるいは誘拐して集めることにより——ほとんどの女性は日本の植民地だった朝鮮から集められたが、中国、台湾、フィリピンあるいはインドネシアからの女性もいた——地方の女性に対する無差別的な強姦を減少させ（その結果として、国際的な批判の機会をも減少させ）、コンドームの使用により性病の蔓延を防ぎ、兵士たちの前線での長期間の戦闘に対する褒美を与えることができるのではないかと期待したのである。もちろん、後に計画が世界に知れたとき、日本の政府は責任を認めることを拒否し、何十年の間、政府ではなく民間の業者が戦時売春宿を経営していたのだと言い張りつづけた。しかし、一九九一年に吉見義明は防衛庁（当時）防衛研究所図書館から「軍慰安所従業員等募集に関する件」という公文書を掘り起こした。この文書には軍上層部の責任者の印章が押されていて、中国の支配地域での兵士たちの強姦を止めさせるため、早急に「性慰安施設」を建設するよう命令していた。

一九三八年、南京の近くで、最初の公的な慰安所が開店した。この「慰安」という言葉を女性たちや彼女らが住んでいた「家」に関連させて使用するのは馬鹿げたことである。そのような用法により、三味線を弾く美しい芸者が温泉で男たちを洗い、指圧マッサージを施すというような印象が、魔法の呪文

を用いるかのようにかもしだされる。実際には、これらの売春宿の状態は、ほとんどの文明的な人々の想像が及ぶことが到底できないほど、惨めで浅ましいものだった。数知れない女性たち（日本人は彼女らを「公衆便所」と呼んだ）が、運命を知ったときに自ら生命を絶った。他の女性たちは病気になる、あるいは殺害されて生命を失った。生きのびた女性たちも、一生を恥辱と孤独の中で、不妊症になり、あるいは健康を破壊されて、過ぎなければならなかった。大部分の犠牲者たちは女性の貞節を理想とする文化を背負っていたために、生存者のほとんどは、戦後になってもごくごく最近まで、さらなる恥辱と嘲りを被ることを恐れ、自分たちの経験について口を開くことができなかった。アジアの儒教道徳、特に朝鮮の儒教道徳は、女性の純潔を彼女らの生命よりも大事な徳として高く評価し、そのような面目を経験しながら自殺せずに生き続けることができる女は存在自体が社会に対する侮辱であるという観念を保持していた。かくして、何人かの元「慰安婦」が沈黙を破る勇気を獲得し、自分たちの受難に対する日本政府の金銭的な補償を模索することができるようになったときには、半世紀が過ぎ去っていた。

南京の背後にある動機

さて、いよいよ最も気がかりで最も困難な疑問を取り上げなければならぬ。それは南京における日本人の心の状態である。小銃と銃剣を握って、そのような暴虐を犯した十代の兵士たちの心の内側はどうなっていたのだろうか。

多数の学者はこの疑問と格闘し、そしてその解答を得ることはほとんど不可能だと感じるにいたる。

妻ハルコ・タヤ・クックとの共著で *Japan at War: An Oral History* を書いたテオドール・クックは、南京

大虐殺における残忍な蛮行に困惑せざるを得ないことを認める。彼は日本の内戦において、これに匹敵するものを見つけない。組織的な破壊と都市住民の大量殺戮は、日本の歴史というよりも、むしろモンゴルのその一部のように見える。南京の日本人の心の成り立ちを検証しようと試みることは、「ブラックホール」を覗くようなものだと言った。

多くの人は、日本人の南京での蛮行を、日本人の名高い絶妙の丁寧さや行儀の良さと調和させることができない。しかし、一部の軍事専門家たちは別々のものに見える二つの性向が、実際にはコインの表裏であると信じている。彼らは、農民が武士の質問に対して丁寧を受け答えができなかった場合には、農民の首を切り落とす権利を何世紀にもわたって持ち続けたかつてのサムライたちの恐ろしい身分を指摘する。「今日まで」アメリカ海軍の情報将校は第二次世界大戦の時期に日本の文化について書いている。「丁寧な回答という表現で日本人が抱く概念は、質問者を満足させるもの、ということだった。行儀の良さが日本人の特徴であることは驚くことなのだろうか？」

他の研究者は、日本人の戦時の残虐行為の根源を日本の文化そのものの中に求めている。アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは著書『菊と刀』で、日本社会の道徳律は普遍的ではなく、局所的、特殊であるので、国外に出た場合には簡単に崩壊してしまうと書いている。他の研究者は、キリスト教ではない日本の宗教に問題点を求める。キリスト教はすべての人間が兄弟であるという観念を広めたのに対し、——実際に、すべてのものが神に似せて創造されたとする——日本の神道で神に似せて創造されたとされるのは天皇とその子孫だけである。このような相違点を指摘しつつ、ある文化は、たとえそれが洗練されているとしても奥底に種族意識が残っており、個人が種族内の他者に対して負う責務と

外部の者に対するそれとは大きく異なっていると結論づけている。

この想定は本質的な危険性をはらんでいる。というのは、この想定は暗黙裡にふたつの考えを導き、またそれを前提にしているからである。そのひとつは、日本人は、彼らの宗教に規定される徳目により、西欧の文化に比べて本来的に人間性を欠いているので、異なる標準をもつて判定されなければならないというもので（無責任で恩着せがましい考え方だと私は思う）、第二のものは、ユダヤ教からキリスト教へと受け継がれてきた文化は、南京大虐殺のような暴虐行為を犯す許容力がいく分でも小さいというのである。敬虔なキリスト教国のドイツにおけるナチズムは、一九三〇年代と一九四〇年代の時期にドイツの精神を非人道化させる道を進み、彼らがドイツの敵と宣言した民族を悪魔にさえ見立てたということも確かな事実である。その結果として起こったのは、人間性に対する、この惑星が経験してきた中でも最悪の犯罪であった。

千年単位の歴史を振り返ってみれば、どのような種族も文化も戦争における残虐性の専有者ではないように見える。文明の表面を被っている外膜は極端に薄いもので、非常に簡単に剥がし去ることができようである。特に戦時となれば、なおさらである。

それでは、南京市において、来る日、来る日も、来る日も続けられた剥き出しの蛮行を、どのように説明すればいいのだろうか。これらと同類ともいえるナチの構成員のほとんどが、牢獄の中で、あるいは死刑執行者の前で滅び去り、生きていたとしても余生を法からの逃亡者として過ごしているのとは違い、日本の戦争犯罪人の多くは今でも生きていて、日本政府の保護のもとで、安穏な心地よい暮らしを送っている。それゆえに、この惑星において、彼らは、国際法廷の報復を恐れることなく、第二次世界

大戦時の残虐行為を犯したときの考え方や感覚を、筆者やジャーナリストたちに垣間見せてくれることができる数少ない人々なのである。

学ぶべきものがひとつある。日本の兵士は単に中国との戦闘に備えて鍛えられていただけではなかった。彼は中国の戦闘員と非戦闘員を同じように殺害するという作業に備えて鍛えられた。まったくのところで、日本軍では、攻撃してこない人々を殺害することに抵抗する本能を麻痺させるために、さまざまな競技や実習が設けられていたのである。

たとえば、首都南京への途上で、日本兵は殺人競争に参加させられ、それを日本のメディアがスポーツ競技のように熱心に報道した。もともとも有名なのは、一二月七日発行のジャパン・アドヴァタイザー (Japan Advertiser) 紙に「百人斬り競争大接戦中の少尉たち」という見出しで報じられたものである。

向井敏明少尉と野田毅少尉は、ともに句容の片桐部隊所属であるが、日本軍が完全に南京を占領するまでに、自分の剣でどちらが先に百人の中国人を斬り倒すか、という友好試合を行っていた。両少尉は試合の最終局面に入り、首一つの鏢ぜりあいを演じている。日曜日(十二月五日)には、「スコア」は朝日新聞によれば、向井少尉八十九、野田少尉七十八。

一週間後に同紙は、どちらが先に百点を達成したのが判定できなかったもので、目標が百五十に引き上げられたと報じた。「向井の刀は競争で少し刃こぼれした」。ジャパン・アドヴァタイザー紙は報道した。「向井は、この刃こぼれは中国人を鉄兜ごと真二つにした結果であると説明した。試合は『愉快だ』

と彼は言った。」

このような残虐行為は南京地区だけに固有のものではなかった。むしろそれは、戦争の全期間を通じ、中国全域で日本人によつて行われていた感性鈍磨の訓練の典型だった。次の、田島という日本の兵士の証言は、特別なものではない。

ある日、小野少尉が言った。「お前たちには人を殺した経験がないはずだから、今日は殺人訓練を実施する。お前らは支那人を人間と思つてはいけない。犬や猫よりも価値のない何かと考へろ。勇気を出せ！ さあ、殺人訓練を志願するものは前へ出る」。

誰も動かなかった。少尉は癩癩を起こした。

「臆病者！」彼は怒鳴つた。「お前らの中には一人として日本兵と呼べるものはいない。だから、誰も志願しないのだ。よろしい、俺が命令する」。そして、私たちの名を呼び始めた。「大谷―古河―上野―田島！」（何と、私もだ）

私は震える腕で銃剣を立て、恐怖におびえる中国人のほうにゆっくりと歩いていった。中国人は穴の横に立っていた。その穴は、彼が掘るのを手伝った墓穴だったのである。私は、心の中で彼に許しを請い、眼を閉じ、少尉の悪態を耳に、石のようにこわばつた中国人に銃剣を突き出した。再び眼を開いたとき、彼は穴の中に落ちていた。「人殺し！ 犯罪者！」私は自分に言った。

新兵にとって、恐怖は自然な衝動だった。ある日本人の戦争の回想記には、若々しい新兵の集団が、

経験をつんだ古参兵によって民間人の集団が拷問され死んでいくのを目撃したときに、ショックを隠せなかった状態が描写されている。彼らの司令官はこの反応を予期していて、日記に書いている。

「新兵はみなこんなものだが、彼らはすぐに自分で同じ事をするようになるだろう」

ところが、感性の鈍磨は新人の士官にも必要なことだった。富永正三という名前の古参士官は、彼自身が罪のない若者から殺人機械へと変貌していった過程を生々しく回想した。広島第三九師団歩兵第二三二連隊に配属されたとき、富永は軍事学校を出た見習い士官の少尉だった。自分の配下の兵士たちを紹介されたとき、富永は驚いた。「彼らの眼は殺気を帯びていた」。富永は思い出した。「それは人間の眼ではなく、豹や虎の眼だった」。

前線で、富永は他の新人見習い士官たちとともに戦争への耐久力を強化する烈しい訓練を受けた。訓練のプログラムで、教官が捕虜を閉じ込める部屋のやせ細った中国人を指して、士官たちに言った。「これが君らの腕試しの材料だ」。毎日、毎日、教官は首を斬り落とす方法と生きた捕虜に銃剣を突き刺す方法を教えた。

最後の日に私たちは試験会場に連れて行かれた。二十四名の捕虜が、後手に縛られてうずくまっていた。彼らは目隠しをされていた。横十メートル、幅二メートル、深さ三メートル以上の大穴が掘られていた。連隊長、大隊長、中隊長が、準備された席に座っていた。田中少尉が連隊長に一礼し、「ただいまから始めます」と報告した、使役兵に命じて捕虜の一人を穴の縁に引き立てさせ、抵抗するのを蹴飛ばし、引きずるようにして穴の前に引き据えた。田中は私たちの顔を見廻

し、「人間の首はこのようにして斬るんだ」といいはなつや、サツと軍刀のさやを払い、用意してあつた水桶から杓子で水を汲み、それを刀身の両側にかける。それから右手で軍刀を一振りして水をきり、捕虜の背後に両脚を開いて立ち、腰を落とすし、軍刀を右上段に構えた。「エイ！」という気合もろとも目にも止まらぬ早業で、軍刀は振り下ろされた。首は一メートル以上も飛び、左右の頸動脈から噴水のように二本の血柱が立ち、胴体は穴の中へ転げ落ちた。

私たちはあまりにも凄惨な情景に呼吸も止まる思いだった。

しかし、富永正三は徐々に殺人を学んでいった。そして、それに熟達するにしたがつて、彼は配下の兵士たちの眼が恐ろしいとは感じなくなった。彼にとって、残虐行為は日常茶飯事になり、ほとんど陳腐なものになった。自らの経験を思い起こして、彼は書いている。「私たちは彼らをこういうふうにした。家庭での善良な息子たち、善良な父親たち、善良な兄たちが、前線に連れてこられて互いに殺しあつた。人間が悪魔に変身した。誰でも、三ヶ月で悪魔になる」。

天皇の前では、自分自身を含む、すべての個人の生命が無価値だと教えられていたので、日本兵は簡単に殺すことができたのだと認める元日本兵がいる。南京での一連の虐殺行為を証言した東史郎は、著者への手紙の中で彼の戦友たちの習性に関する優れた視点を提供している。京都府の福知山歩兵第二連隊での二年間の軍事訓練の間、彼は「忠節は泰山よりも重く、私たちの人生は鴻毛よりも軽い」と教えられた。彼は、兵士が戦争で達成することができると最高のものである名譽は、戦死して戻ることだったと回想し

た。天皇のために死ぬことは最大の榮譽であり、生きて敵の捕虜になることは最大の恥辱である。「もし私の生命が重要でないのならば」、手紙の中で東は書いています。「敵の生命は必然的にもっと重要でないものになります。……この哲学が私たちに敵を見下させ、結果として捕虜の大量殺害や虐待へと導いたのです」。

インタビュを重ねるごとに、南京大虐殺から戻った元日本兵たちは、自分たちが良心の呵責や罪の意識をまったく感じていなかったし、不幸な民間人を拷問するときにさえもそうだったという経験を正直に報告する。永富博道は、陥落した首都、南京における彼の感動について、率直に語った。

私は、殺戮された何千の死体の山の間を通過してトラックで移動していたことを思い出す。私たちが停止し捕虜の集団を後ろから引き立てていると、野犬が死体の肉を食いちぎっていた。そのとき、将校が私たちの肝試しをした。彼は刀を抜いて手で叩いたと思うと、突然、私たちの前で縮こまっていた中国人の少年の首に、強く振り下ろした。首は見事に切り落され、捕虜の集団の間を転がり、胴体は前のめりに倒れて、首から二筋の噴水のように血がほとばしり流れた。将校は私に、首を記念品として家に持ち帰ったらどうかと勧めた。私は誇らしげに微笑んで、彼の刀を取って人々を殺し始めたことを覚えている。

六〇年間の魂の葛藤を経て、永富は別の人間になっている。鍼灸治療院を開業し、彼はその待合室に自責の聖堂を建てた。患者は南京における彼の裁判と彼が犯罪を完全に告白しているビデオテープを観

ることが出来る。治療師の温和で丁寧な物腰とは裏腹の彼の恐ろしい過去。彼がかつて残忍な殺人鬼だったことを想像することはほとんど不可能である。

「兵士たちが銃剣で乳児を突き刺し、生きたまま熱湯の鍋の中に放り込んだことを知っている人はほとんどいません」。永富は言った。「彼らは十二歳から八十歳までの女性を輪姦し、性欲を満たすことができなくなつたときに殺しました。私は首を切り、餓死させ、焼き殺し、生き埋めにして、二百人以上の人々を殺しました。私がけだものに変身してそのようなことをすることができたのは恐ろしいことです。私がしてきたことについては言葉ありません。本当に私は悪魔でした」。